

大阪力 Part3

童謡

林梓生

11月17日午後0時45分。兵庫県淡路市にあるホテル「アテーナ淡路」で「第1回童謡ウォーク」の開会式が始まった。もり・けんが「きょうは童謡を思いっきり歌いましょう」とあいさつ。同1時、ゼッケンと緑の帽子姿の親子連れら約80人が出発した。

和泉市に住むハーモニカ奏者もり・けん(56)は、自称「童謡の伝道師」。「子どもたちの間で、優しい気持ちを育てる童謡が歌われる場がめっきり減ってしまった」と嘆く。その原因は、「教科書から姿を消していったせいもあるが、戦後育ちの人々が、自分の子どもにしっかり伝えなかったのが大きな原因」。全国を飛び回り、コンサートや講演、イベントなどで童謡の普及に取り組む。

親子で歌い継ごう

発端は今年正月。もり・けんとハーモニカ教室の生徒、ファンらが今宮えびすに参拝した後の「飲み会」だった。「童謡を歌いながら自然の中を歩く催しが出来たらええな」「よし、決行やー」。もり・けんに賛同する八尾市の江川徹雄(62)が委員長となり実行委員会を結成。会合を重ねて本番を迎えた。参加者の列に交じり、もり・けんがハーモニカを演奏。「どんぐりころころどんぶりこ」「鬼追いかの山」。親子の大きな歌声が

ハーモニカ奏者 全国駆ける

響く。淡路市津名周辺の町中や山道、海岸沿いなど約5・6キロを歩いて午後3時、出発地点に帰着。全員に「完歩証」が贈られた。

高槻市から参加した織沙久美は「大好きな歌を、もり・けん先生の伴奏で歌えて楽しかった」。堺市のハーモニカ教室で学ぶ後藤俊之(65)は、「山あり海ありの景色の良いルートを歌いながら歩いて、すっきりしました」と目焼きした顔を輝かせた。

午後6時からは同ホテルで「日本の歌百選」の演奏会。もり・けんはバッグから大小10本以上のハーモニカを取り出して「朧月夜」「里の秋」「虫のこえ」などを演奏。その合間に「伝道師」として、聴衆に熱っぽく語りかけた。

「大脳が形成される幼児期に童謡を聞き、歌うと、情感や他人を思いやる心が育ちます」

「『故郷』の冒頭、ボクは子どものころ『鬼美味しかの山』だと思っただけでした」

「物悲しい『里の秋』は単なる季節の歌ではないんです。昭和16(1941)年に作られた曲。3番は『さよならさよなら椰子の島……』と、父が南方から帰るのを祈る内容なんです」

もり・けんは「歌い継ごう」日本の童謡「歌い継ごう 日本の歌」(いずれも登龍館発行、税込み526円)を出版。CD「童謡の世界」(同2)「同3」(いずれも登龍館、税込み1600円)をリリースしている。

演奏会の余韻が残るなか、夕食を兼ねて懇親会。もり・けんを囲み、「歌」を巡る話が午前2時すぎまで続いた。

翌朝、もり・けんは7時すぎに朝食を済ませ、江川の運転する軽乗用車で大阪空港へ。茨城県に飛び、作詞家・野口雨情(1888-1945)の孫娘との音楽イベントの打ち合わせに向かった。

(文中敬称略)



①もり・けんさん②もり・けんさんのハーモニカに合わせ「童謡ウォーク」をする人たち③いずれも兵庫県淡路市で